

巻頭言

人文社会科学と宇宙開発

宇宙航空研究開発機構（JAXA）宇宙科学研究所長

常田佐久

宇宙開発に関わっている人たちが宇宙機関は、探査機やロケットの開発に日夜邁進している。これらの人達が、自分達の仕事と人文社会科学を結びつけることは余りないだろう。しかし、宇宙機関やそれに携わる人々が技術のセンサーだけでなく、人文科学的なセンサーを持って、自分達が解さない言語であったとしても、外からのささやき声を聴く耳を持つこと、自分達がどのような影響をこの世界に与えているかを知る目をもつこと、そして、それを理解し咀嚼し答えていくことは、案外大事かもしれない。

谷川俊太郎が「二十億光年の孤独」で詠った通り、大宇宙のなかで我々は孤独だが、一人ぼっちではないかもしれないことが分かってきた。地球外に惑星系が多数発見され、広大な銀河系にある千億の星の少なくともその三分の一は、惑星を従えている。軌道上の最先端の宇宙望遠鏡により、生命を育む環境が銀河のかなたの惑星にあるかが分かる日がやってくるに違いない。また、生命の起源を求めて、JAXA を含む各国の宇宙機関は、こぞって探査機を、我が太陽系内の惑星・小惑星・彗星に送り込み、世界は太陽系大航海時代に突入している。地球の外に生命の兆候が発見されると、人々はこの事実に関心を持つだけでなく、恐れや自分の存在への根源的な問題意識を持つかもしれない。科学者であり思索家であったカールセーガンの「コンタクト」には、この問題意識が描かれている。まさに、我々は、ポール・ゴーギャンが 1897 年に描いた絵画『われわれはどこから来たのか われわれは何者か われわれはどこへ行くのか』の課題が突き付けられることになる。

日本の経済状況が厳しいなか、宇宙開発は巨額の国費を使い続けている。私は、JAXA はそれに値する成果を挙げていると思うが、日本経済の状況が悪化したとき、大きな災害など国の存続に関わる事態が起きたとき、あるいは絶対考えたくないことだが、宇宙開発で万一大きな失敗が起きたとき、国民が望む宇宙開発のプライオリティはどうなるだろうか。なぜ宇宙開発をするのか？ この道はどこにつながっているのか？ 科学技術の言葉だけではない言葉を我々一人一人が持たないと、宇宙開発は案外脆弱かもしれない。また、今後、日本が国際宇宙探査の枠組みで巨額の費用のかかる月や火星の有人探査に関わるかどうかは現実的課題であり、科学技術を超えた広範な議論が必要だ。

個々の人々の人生からみた宇宙開発の意義とは何だろうか？通信衛星や気象衛星の恩恵に浴すると言ったこと以外は、何の関係もないかもしれない。しかし、『現実のみを見る人よりも、微かでも、そのこと(宇宙)を心の片隅に置いている人の方が、おそらく心は強いと私は信じる』（竹宮恵子京都精華大学学長）¹。宇宙開発は、間違いなく人類に宇宙的視点をもたらした。宇宙開発は私たちが思っている以上の影響、たぶんとてもポジティブな影響を、すでに私たち自身にもたらしている。ハンナ・アーレントは、この視点を危険なものであると警告したという。宇宙開発に携わる者は、こうした相反する意義を持つ地点に宇宙開発が到達したことを理解して、さまざまな価値観を持つ人々に向かい合うべきだろう。

宇宙開発は、もとより人類の広範な営みの一つだ。ここで挙げた例を見ても、宇宙開発と人々の考え方の双方向に影響しあう関係について、科学技術の側面からだけでなく、人文社会科学の観点から考えることは大事だろう。それには、そのことが真に必要とされる時が来てからでは遅く、普段の努力が必要だと思う。本 JAXA レポート「人文・社会科学研究活動報告集 2015 年までの歩みとこれから」には、このことを自覚された先駆者たる諸先生方が執筆された力作がそろっている。この冊子を宇宙開発と巨大科学技術に携わる多くの方々が手に取らんことを期待している。

¹「物語と宇宙の謎かけ」、竹宮恵子、「こころの未来」特集宇宙、2014, vol. 13, 26、京都大学こころの未来研究センター